

---

# CAGE - 籠の中の記憶探偵 -

白城海

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

CAGE - 籠の中の記憶探偵 -

### 【Nコード】

N9023Y

### 【作者名】

白城海

### 【あらすじ】

「人が 死んでる？」

ある日学校で死体を発見してしまう主人公、天海慶次。  
震える彼に向かい、幼馴染の風間祈衣は宣言する。

「高校生探偵の出番ね！」

主人公にベタボレの中二病の後輩。毒を吐くけど兄思いの妹。自称

高校生探偵の幼馴染。変態でブラコンの兄。

そんな奴らとのドタバタの日常に紛れ込んできた《非日常》

死体発見の日から相次ぐ闇討ち。話を聞いてくれない警察。そして、巻き込まれ傷ついた後輩。

何故彼は狙われるのか。

そのカギは 彼の《記憶障害》の中にあつた。

## 第一話 俺と死体と女子高生探偵

「六月四日。十六時三十分。私立平坂高校 音楽室」

唐突だが聞いてほしい。

『音楽室の扉を開いたら人が死んでいた』。

目の前の出来事に俺 天海慶次は心の奥底から恐怖し、絶句していた。

六月初旬とは思えないほどの暑さ。

吐きそうなほどの熱気。

体中に張り付く湿気。

普段なら地球に向かって文句の一つも言ってやりたい程の不快指数。

体の至る所から汗が噴き出すのを感じる。冷たい汗。恐怖からの汗。

手が震え、寒気が全身を覆う。

まずは目を疑い、次に正気を疑った。百人が百人とも俺と同じく無様な姿を晒すはずだ。

「夢だ。夢に違いない」

ゆっくりと目を閉じ、そして開く。

目に映るのは天井から延びたロープ。そしてだらしなく垂れ下がった男の四肢。

もちろん床に足を着いていない。首の骨が折れているのだろうか、死体は奇妙な角度で首を垂れ、上目づかいとも言えるような顔を俺の方に向けていた。

コイツは夢じゃない。間違いなく現実だ。

死体と目が合う。今にも眼窩がんかからはみ出しそうに飛び出た、それでいて暗く光の無い瞳。

すぐにも逃げ出したいのに床に張りついたかのように足が動かない。

すぐにも目を逸らしたいのにまるで自分が死体になってしまったかのように首が動かない。

このまま死体に魂を引きずられ俺も死んでしまうのではないだろうか。混乱が妄想を呼び、妄想が錯乱を引き出し、意識が遠くなる。

その時だった。

「どうしたの、ケージ？」

聞きなれた女の声が引き金となり、ようやく俺の体が硬直から解き放たれた。ただし抜け出せたのは首だけだった。

後ろを振り返ると見慣れた女の顔。《風間祈衣》だ。

小顔で化粧気が薄く、色白で整った顔立ち。快活さを象徴するかのようにぴんと外側に跳ねたミディアムロングの癖っ毛。猫を思わせるやや釣り上った大きな瞳。その瞳が俺の顔をじっと覗き込んでいた。

「人が……死んでるんだよ」

教室の死体を指差し、伝える。手が震えているのが自分でも分かった。

俺が指を向けた方向を風間が見る。一瞬、目を見開き絶句。常識的な反応だ。

だが、彼女が続けた言葉は常識的とは正反対のものだった。

「困ったわね。このままじゃ練習できないわ」

「そう言う問題か!？」

思わず叫ぶ。変わり者だと言う事には気付いていたがここまでとは思わなかった。

「冗談冗談。分かってるわよ。高校生探偵の出番って言いたいんでしょ?」

風間が現実離れた奇妙な発言をする。

高校生探偵。

風間祈衣と言う女はミス터리やサスペンスものが大好きで、ことあるごとに探偵を自称している。

事実、校内の出来事に限って言えば定期テストの順位から同級生の三角関係の内部事情まで完璧に把握しているらしい。俺に言わせ

れば探偵と言うよりはワイドショーだが。

「あたしのカンが言ってるの。この事件は殺人の可能性があるって」  
とんでもない発言だった。それも真顔で、真剣に。俺の瞳を真っ直ぐに見据えて。

風間は思いつきをそのままノリと勢いで口に出す女だが、今回はかりは冗談ではなさそうだった。

「可能性って事は、自殺じゃないかもって事か？」

「そう、これは音楽部創立以来の天才ボーカリストであり、高校生探偵であるあたしの出番に違いないわ。推理漫画の王道よ」

首吊り死体を指差し、風間が嬉しそうに声を弾ませた。

「はあ、仕方ないな。期待してやるよ。お前の実力って奴に」

「任せて！あたしの歌で世界を変えてみせるわ！アタシの歌を聞けえっ！」

「そっちは欠片も期待して無えよバカ！探偵の方だ、探偵の方！」

思い付きをそのまま口に出したただだった。コイツは俺の想像を裏切る事が趣味なのか。

「仕方ないわねー。じゃあ、まずさしあたってする事、それは」

風間がおもむろにポケットから携帯電話を取り出し、キーを操作する。現場を画像に残すつもりなのだろうか。

慎重な操作。そばで見ている俺にでさえ緊張感が伝わってくる。  
一体何をするのだろうか。

長いようで短い時間。

俺の視線を気にしてかせずか、風間はおもむろに携帯電話を耳にあてた。

「あ、もしもし。警察ですか？高校に死体があるんですけど…はい、場所は」

「通報かよ！？高校生探偵はどこに行った！常識すぎて予想外だよチクショウ！」

「市民の義務じゃない。何を言ってるの？」

「探偵だったら推理しろ！」

「警察に任せた方が確実だし？通報は趣味みたいなものだし」

ウサ美ちゃんがお前は。

「それに、別に推理しなくても死ぬわけでもないし」

「いつそ死ねよ」

「それに、電話中なんだから邪魔しないでよ。警察の人困ってるじゃない」

「俺のせいか！？俺のせいなのか！？」

理不尽だ。あまりにも理不尽だ。

「……ったく。いつもいつもバカみたいなことばかり言いやがって。少しは俺のストレスをだな」

「でもさ」

ぶつぶつと呟く俺の愚痴を、通報を終えた風間が遮った。

「震え、止まったわよね？」

にこり、と俺を瞳を覗きこみ微笑む風間。

そう、彼女の言った通り、いつの間にか俺の体の震えは収まっていた。

「はぁ」と嘆息し諸手を挙げての降参する俺。

そんな俺を見て、妙に勝ち誇った顔が癪に障ったのでとりあえず「死ね」と罵倒しておいた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9023y/>

---

CAGE - 籠の中の記憶探偵 -

2011年11月27日00時50分発行